

最上の選択

(申命記 8:3、ルカによる福音書 10:38-42)

当たり前のような話ではありますが、家族の兄弟、姉妹をみて不思議に思う時があります。なぜならば、同じお母さん、お父さんから生まれたはずなのに、性格が全然違う、あまりにも違うところにおもしろさを感じます。外見が似ていても趣味や好みがはっきり違うところがあります。双子でも性格が違うようです。うちの家族だけを見てもそうです。いろいろな面で妹と私は違います。皆様の家庭においても感じられるところではないでしょうか。今日読み上げました聖書にも性格が全然違う姉妹が出てきます。

マルタとマリアという姉妹がいました。ヨハネによる福音書 11 章を見ると二人にはラザロという名前の兄弟がいます。彼らはベタニアというところに住んでいて、ときどきイエス様が訪れ、くつろぐ場所になるほどイエス様と親密な交流をしていたようです。イエス様が疲れた体と心を癒す場所として訪ねていたということは、この人たちがいかにイエス様に愛されていたのかが分かります。ラザロが病気になり、それをイエス様に伝えますが、その時に「主よ、あなたの愛する者が病気なのです(ヨハネ 11:3)」と言います。すると、イエス様は「私たちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く(ヨハネ 11:11)」と言われます。イエス様がラザロを友と呼んでおられるのです。

38 節でのある村というのはそのベタニヤを言っているのです。「ベタニヤ」は「貧しい者の家」あるいは「病む者の家」という意味があるのだそうです。ベタニヤはそのような名称から、エルサレム近くにある村で、オリーブ山の南東の麓にあって、病気の人の世話をする所や、エルサレム巡礼をする人の休む場所があったのではないかとされています。そこをイエス様の一行が訪れました。イエス様お一人ではなく、弟子たちも一緒であったようです。

マルタはその名前の意味が「女主人」であるように、いくつある聖書の記録から考えますと、世話好きで、活発、行動的な性格のようです。いつもイエス様を迎え入れたのはこのマルタでした。この聖書箇所だけではなく、ヨハネによる福音書 11 章でも、イエス様が来られたと聞いた時、すぐ迎えに行ったのはマルタでした。お兄さんが亡くなって悲しい時も平穏な日々の中でもイエス様を真っ先に迎え入れたのはマルタでした。そのようなマルタをイエス様がいかに喜び、愛しておられたかは想像できるものです。

それに比べると、マリアはマルタに甘えているような静かな人柄のように思われます。家の中に座っていた、そのような表現でマリアは描かれています。二人の姉妹の対照的な性格が見えます。

イエス様はその姉妹たちが住んでいる村にお入りになりました。すると、マルタはイエス様の一行を自分の家に迎え入れました。そして、心を込めていろいろなもてなしをしようと奮闘します。あれもこれも大忙しいです。マルタがいかにイエス様を歓待し、尊敬していたのかが分かります。盛大な食事を用意しようと思ったでしょう。一人の手には負えないほどでしたから・・・。当時、パレスチナにおいて、お客さんを接待することはとても大事なことで、女の人の役割でした。ましてや、イエス様のことですので、マルタは思い切り頑張っていたのではないのでしょうか。

主のために何かをしたい、献げたい、それは尊い気持ちです。それによってわたしたち教会は支えられています。マルタのような献身的な奉仕によって教会活動は成り立っているのです。

では、マルタの問題はどこにあったのでしょうか。マリアはお姉さんの忙しさも気にせず、主イエスの

足もとにべったり座って、イエス様の話を聞くのに夢中になっていました。慌ただしいマルタの姿も忘れるほど、イエス様のお話に捕えられて周りの状況を忘れてしまったようです。

そのようなマリアにマルタは腹が立ってしまいました。マルタの気持ちがよくわかります。私だってそうなるかもしれません。それで、マルタはイエス様のそばに近よって言いました。「主よ、私の姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」とイエス様に言います。このような行動、言葉には、マリアだけではなく、マリアのそのような態度を受け入れているイエス様にも不満を持っているようです。イエス様に指示をしています。イエス様も自分の思い通りにして欲しいのです。なぜなら、自分が正しいと思っているからです。しかし、イエス様は言われます。「マルタ、マルタ」マルタの名前を2回呼ぶということはとても親しみ深く、そして、よく聞いてほしいという重みを感じられる呼び方です。「あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

イエス様はマルタに、「あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している」とおっしゃいます。マルタがイエス様を愛し、何とか心を込めて思い切りもてなしをしようとするマルタの気持ちをイエス様が分からないわけではありません。しかし、マルタは自分の手に負えないほどの多くのことをしようとしたのです。多くのことに心が乱れ、ついには、マリアとイエス様にまで腹を立ててしまいましたから。そして、そこには、こうすべきだという自分の思いがあるのです。イエス様を歓待するためにはこうすべきで、わたしも、あなたもこうすべきだという自己主張が強くなっています。いつの間にか自己中心になってしまいました。

しかし、何よりもマルタの大きな問題はイエス様が本当に望んでおられることがなんであるかを知ろうとしなかった、つまり、イエス様がどのような方であるかを知らなかったところにあります。

イエス様はまず、主の御許にひれ伏し、そのみ言葉に耳を傾けることを欲しておられたということです。マリアはイエス様の足もとでそのみ言葉を聞いていました。イエス様の真理の言葉の力に捕えられていました。主イエスの言葉に秘められた神様の救いを求め、他のことを考える余裕がなかったのです。

マルタ、そんなに多くのことを私にしようとして心を乱す必要はない、必要なことはただ一つでいい、そして、わたしにとって一番嬉しいことは私の言葉に耳を傾けることだ、そのようにおっしゃっておられるのではないのでしょうか。もちろん、マルタの奉仕も必要です。しかし、一番大事なことではない、ということです。主の足もとで主のみ言葉に耳を傾けることは礼拝であり、主との交わり、それこそが主に喜ばれることです。主のために何かしたい、大事です。しかし、それによって一番大事なことを失ってはいけないのです。

最上の選択は主の足もとでみ言葉を聞くことです。教会は何かをするためにあるのではなく、一週間の歩みを止めて、主の足もとにいるためにあるのです。マリアのように主の御前に留まるために私たちは教会に来ているのです。主の足もとにいるということは喜びだけのものではないのです。時には主のみ言葉の光に照らされて苦しくなることもあります。自分の罪があらわにされる苦しみ、真理によって示される歩むべき厳しい道、その前で、選択し、決断をしなければならない苦痛を伴う時もあります。主との交わりは喜びであり、慰めですが、肉の思いを捨て真理に立ち返る決断を要するものでもあります。私の生きる姿を診断し、直される時間なのです。その真理にとらわれることは周囲を意識できないほど

重く、そして神秘に満ちた時間であるのです。

マリアはその方を選びました。イエス様が「マリアは良い方を選んだ」と言われます。つまり、私たちは自ら選ぶ自由の中にいるのです。強要でもなく、しなければならない義務でもないのです。主に対する愛と喜びから始まったマルタの奉仕は、いつの間にか、妹に、イエス様に対する不平になり、しなければならないという自己主張と重荷になってしまったのです。イエス様の心とは遠い行為になり、自分の姉妹を批判し、イエス様にまで不平を言う、卑しいものになってしまいました。

週ごとの礼拝は、主の足もとにひれ伏すことです。私たちの罪が許され、生きる疲れが癒され、無力なものに力づけてくださる主の恵みによって、私の全存在が変えられる時間です。その招きと約束の場が礼拝です。私たちがこの礼拝に支えられ、この世に向かって主の証人として生きることができるのです。生きる力を得るために私たちは主日ごとに主の足もとに座っているのです。

イスラエルの民が荒野の試練の期間があったのは、人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった、と聖書は伝えます。主のみ言葉こそ、私たちを生かす、真理であり、命なのです。マリアはその福音の真髄をつかんだ人でした。マリアはこの方こそ救い主である、この方のみ言葉こそ真理であり命であることを知ったのです。ですから、動くことなく、主の足もとにすがりついていたのです。

主イエスの足もとに座るということは、弟子になることを意味します。男性中心の世界において、女性が弟子として許されているということは、今日の聖書箇所の前に出てくる、善いサマリア人の例えのように驚くべきメッセージが込められているのです。主の福音は選ばれたイスラエルの民だけではなく、異邦人にも、女性にも隔ってることなく、開かれているのです。この驚くべき恵みを知らなかった人々には、救い主イエスは躓きであったのです。

主の一方的な愛と恵みによって救われた私たちは、一番良い方を選びたいものです。そして、奉仕も感謝と自由の中で、喜びを持って行いたい。他の人を見るのではなく、主を見るのです。

まず、静かに主の足もとで、主のみ言葉が私に成し遂げてくださる奇跡に共に身をゆだねましょう。